



① ユーカリ 被爆直後の黒焦げになった姿が写真に残っているが(右)、ユーカリはもともと火事に強い樹木だったことが幸いして生き延びた。後の台風で幹が折れたが、ひこばえ木の根元付近から生える新芽が育ち、みるみる大木になった。中沢啓治の漫画「ユーカリの木の下で」にも登場する
写真(右) 林 重男



② マルバヤナギ 爆風で幹が真っ二つに裂けかけたが、戦後数十年が経ってから樹木医の手当てを受け、生き延びることができた。とはいえ寿命が近づいており、ひこばえを出して次世代を育てようとしている



広島城址公園
◎広島電鉄紙屋町東・紙屋町西電停から徒歩約15分



③ クロガネモチ 広島城本丸に設けられた大本堂の前庭に植えられていた。大本堂は被爆によって全壊したが、この木は被爆したとは思えないほど元気に枝を広げ、実をつけている



黄色いプレートは被爆樹木の印

被爆樹木に出会う

原爆の被害を受けてもなお生き残った樹木は「被爆樹木」と呼ばれている。

インフォメーション

爆心地からおおむね半径2km以内にある約170本(55カ所)が、広島市によって認定されている。◎広島市役所市民局国際平和推進部平和推進課 082-242-7831

広

島市内には、原爆を生き延びた樹木、「被爆樹木」が多数あることをご存じだろうか。広島市が認定しているだけでも、その数はおよそ170本に及ぶ。「75年間は草木も生えない」と言われた広島で、木々は新しい芽を吹き、その風説を覆したのだ。被爆樹木には、大きな被爆の傷跡を抱えながら生きながらえてきたもの、被爆したにもかかわらずそのダメージをほとんど見せずに健やかに生き続けた樹木を訪ねてみよう。

惨禍を乗り越え、緑で人々を支えてきた樹木を訪ねてみよう。 ているもの、元の木は回復不能なまでに損傷したが新しい芽を出して次世代を育てたもの、の3種類がある。 専門家の手によって大事に手入れを続けていけば、樹木の寿命は人間よりもはるかに長い。彼らは文字通り「生き証人」として後世に原爆の惨さを伝え、強靱な生命力で、平和への希望をつないでくれる。

平和に資する 樹木医の仕事

広

島の中の緑化は、平和に資する重要な仕事なんだ。 三十数年前、勤めていた造園会社の社長の一言が、私の行くべき道を決めました。私はその後、樹木医として被爆樹木を見守ろうと決め、以来、市内の木々の世話を続けています。

被爆樹木は、焼け野原となった広島で新しい芽を出し、人々を力付けてきた貴重な存在です。けれど、被爆して傷を負ったり、傾いたりした木は、そのまま放置しては倒れてしまいます。都市化が進んだことで根を伸ばす余地がなくなり、衰えてしまう木も増えています。

そこで私は、被爆によって傾いた木を支柱で支えたり、周りを踏み固められてしまったために根が水や養分を取れなくなるといった人為的な悪影響を土壌改良で軽減したりすることで、被爆樹木が本来の寿命を全うできるように支えようとしています。

多くの木が高熱や爆風で激しいダメージを受けました。しかし生き残った木々を見ると、人間に比べれば、樹木は放射線の影響をさほど受けていないようです。人類史上初の原爆投下という惨禍を力強く生き延びた樹木が、平和都市広島象徴であり続けてくれるように、これからも被爆樹木の健康を見守っていききたいと思っています。



堀口 力 (ほりぐち ちから)
樹木医。福岡の庭師に弟子入りした後、広島で造園会社を経て独立。

しゅっけいえん 縮景園の木々



④イチョウ 樹齢200年を超える大イチョウ。爆風の吹き戻しによって幹全体が爆心地方向へ大きく傾き、その熱で樹皮がケロイド状に変化している



縮景園

広島藩主浅野長晟が1620年(元和6)頃に茶人の上田宗箇につくらせた回遊式庭園 ㊟082-221-3620 ㊟12月29～31日 ㊟9:00～18:00(10～3月は～17:00) ㊟一般250円 ㊟広島電鉄縮景園前電停から徒歩約2分



⑤ムクノキ 被爆により幹に大きな空洞ができたが生き延びた。園の端にあるので、木の様子を見るには園外の道路からのほうが良い(柵より川岸には近寄らないこと)



しらかみしゃ 白神社の木々



⑧クスノキ 爆心地から約500mという至近距離で被爆し、焼け野原となった土地で岩のすきまからひこばえが成長した



白神社 平和大通り沿いにある、こぢんまりとした社。㊟広島電鉄袋町電停から徒歩5分

平和記念公園と周辺の木々



⑥アオギリ 爆心地から1.3°離れた地点で被爆し、後に公園内に移植された。幹の半分が焼けてえぐられたが、その傷を包み込むように幹が育っている。この木からとれた種や苗木が世界各地で被爆アオギリ2世として育っている



⑦シダレヤナギ 最も爆心地に近い(370m)被爆樹木。幹は焼失したが、ひこばえが大きく育った。相生橋から旧太田川左岸の土手を北に向かい、青少年センターの西側



平和記念公園と周辺 ㊟広島電鉄原爆ドーム前電停から徒歩約5分



ナスリーン・アジミ

Nassrine Azimi
国連訓練調査研究所(UNITAR)本部長付特別上級顧問。イラン生まれ。UNITAR本部(ジュネーブ)勤務、ニューヨーク事務所長を経て2003～09年まで広島事務所の初代所長。

種をもらった側は、自分が育てた木と長い時間をかけて付き合っていくことで、世界で初めて原爆が落とされた広島という土地との絆が続き、平和を願う意識を持ち続け、それを子どもたちに伝えていける。被爆樹木の種は、命を持った平和のメッセンジャーなのです。

若い人に核兵器の非人道性を伝えようとして、過去の苦しみだけを訴えても伝わらない。彼らには、未来につながる何かを手渡さなくてはいけない。そこで、世界に広がる国連訓練調査研究所(UNITAR)のネットワークと地元広島のNGO「ANT-Hiroshima」の草の根の力を合わせ、樹木医の堀口先生の支えのもとにこのプロジェクトを始めたのです。

私 たちは昨年から、被爆樹木の種を始めた。世界の植物園や大学に贈る試みを配る活動ではありません。被爆で傷つきながらも息を吹き返した被爆樹木は、「破壊の恐ろしさ」と「再生への希望」という二つの強いメッセージを持っている。

被爆樹木の種が世界をつなぐ